

## 丹後地域における弥生時代の鉄をめぐって

野島 永

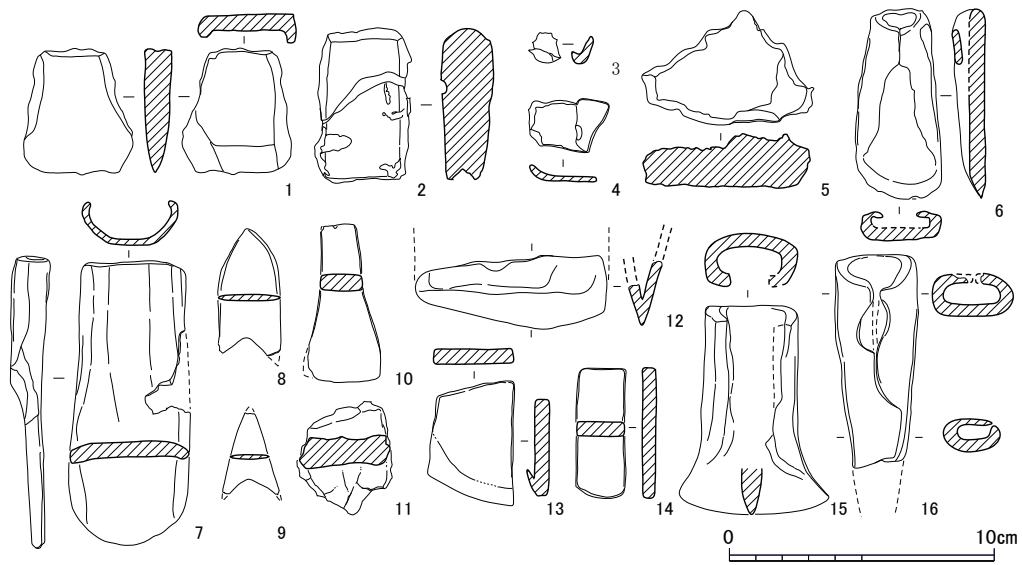
### 1. 弥生時代中期く 鑄造鉄器の舶載と玉作りにおける鉄器導入

#### 与謝郡加悦町日吉ヶ丘遺跡の舶載鉄製品

丹後半島の付け根にある加悦町は、大江山に水源を発する野田川の中流域に形成された狭隘な平地、加悦谷を中心とする地勢をもつ。この谷間を潤す野田川は、天の橋立で有名な阿蘇海に注ぎ、外港の宮津湾から日本海へと結びつく。

昨年蛭子山古墳の北方、この加悦谷を一望できる東岸丘陵斜面に位置する日吉ヶ丘遺跡において、弥生時代中期中葉から後葉の集落の一端と中期後葉の墳丘墓が検出された。墳丘墓は長辺 33 m、短辺 17～22 m の長方形で、その四辺に周溝を掘削し、墳丘斜面にはひと抱えもあるような平石を丁寧に組み合わせて貼り付けていた。いわゆる貼り石方形墳丘墓である。墳丘平坦面やや南西側に、長方形の土壇に直葬された木棺の埋葬が認められた。棺内の被葬者頭部付近から碧玉や緑色凝灰岩の細身の管玉 500 点近くが出土した。管玉は一連の数珠状ではなく、頭部付近に面を成して整然と並んでいたことから、布などに縫い付けられたものかと想定される。宇野隆夫氏は、これを冠の垂飾り（冕旒）と推定し、天子や諸侯など大夫以上の礼冠である冕の可能性も考慮すべきであるという<sup>(1)</sup>。被葬者がそのような漢の冠帯の制度に通じていたかどうかは不明であるが、彼あるいは彼女が集団から隔絶した存在であったことは間違いない。

さて、この墳丘墓の東側、居住空間の一部も調査され、土坑群が見つかった。詳細は不明だが、第 1 図 12～16 の鉄器他が出土している<sup>(2)</sup>。12 と 13 は、鑄造一字形鋤の刃部の破片とみられる。紀元前 2 世紀の朝鮮半島の鑄造鉄斧（斧形鑄造品）は、石製鑄范で作られたため、柄を挿し込む袋部の空隙が刃部先端まで及んでいない。しかし、前漢の鑄造鉄斧（鏹）や一字形鋤などは、内范外形も外范内面とほぼ相似形の鉄製鑄范で作られる。このため袋部空隙が刃部付近まで造形される。このことから、12 は、漢の鑄造技術で作られたものであろう。13 はその一部の打割・研磨による再加工品と考えられる。このような鑄造起源の舶載鉄器片は、前期末葉から中期にかけての環壕集落として有名な中郡峰山町途中ヶ丘遺跡（第 1 図 1）や同町扇谷遺跡（同図 2）にみられる。竹野郡弥栄町奈具岡遺跡には、鑄鉄を加熱することによって個体のまま酸化させて脱炭



1. 峰山町途中ヶ丘遺跡 2~5. 峰山町扇谷遺跡 6. 舞鶴市桑飼上遺跡  
7~11. 弥栄町奈具岡遺跡 12~16. 加悦町日吉ヶ丘遺跡

第1図 丹後地域の弥生時代中期以前の集落出土鉄器

し、鉄の組織を強靱な鋼に変化させたもの(同図11)も認められ、<sup>(4)</sup>中期後葉から当時の漢の先端技術で作られた鉄素材の破片も入手されていたことがわかる。

15は、板状の素材の両端を丸く折り曲げただけの鍛造袋状鉄斧であるが、舞鶴市桑飼上遺跡出土の中期中葉のもの(同図6)に類似する。<sup>(5)</sup>6は、錆化して袋部両端が基部で接着しているが、本来は7や15のように離れていたものとみられ、使用によって刃部が研ぎ減れば、6のようなものになる。16は、列島でも最古の鍛造袋状鉄鑿で、広島県東広島市西本6号遺跡出土の鑄造鉄鑿の形態に近く、<sup>(6)</sup>鑄造品を真似して製作されたものである。これらの鍛造鉄器が搬入されたものか、当地で製作されたものか、にはわかりたいが、扇谷遺跡では中期前葉の鍛冶滓が出土していることから、丹後地域での生産を考えてもおかしくはない。

### 竹野郡弥栄町奈具岡遺跡の玉作りと鉄製工具の導入

丹後半島のほぼ中央を貫流する竹野川は、幅狭い侵食谷を形成しつつ日本海へと注ぐ。奈具岡遺跡は竹野川の中流域、西岸段丘上に立地する玉作りを専業とする中期後葉の集落である。平成7・8年の調査では、74基もの竪穴遺構や竪穴式住居跡が検出された。<sup>(7)</sup>碧玉・緑色凝灰岩や水晶など、50kg以上にもなる原石・未製品・失敗品・剥片類をはじめとした膨大な石材群とともに、石錐・石鋸・筋砥石、鉄製工具などの加工生産具も出土し、

原石から製品までの製作工程が明らかになった。鉄製工具類やその未製品も多量に出土し、鞆羽口や鍛冶炉の存在から玉作り用の鉄製工具の加工も集落内で行われていたことがわかった。このような鉄製品のなかに、先述した漢で生産された夾雑物の少ない強靱な鑄鋼素材がみついている。拳大ほどの水晶結晶体からわずか5 mmの小さな玉に加工する際に、このような鋼素材で作られた各種鉄製工具が利用されたものと思われる。奈具岡遺跡の水晶玉作りで復原される加工方法は次のようである。すなわち、水晶の結晶面や不純物が嵌入した部分を打割除去し、直方体の素材石核を整える。その長辺を左右から交互に打割して板状剥片を作出し、それを縦方向に分割して角柱体と楔形剥片を量産する。前者は調整剥離を加え四角柱体に整形する。これを研磨した多角柱体の小口面から小玉の規格に分割して穿孔し、直径3～5 mm程の小玉数個を生産する。後者の楔形剥片は、打点側を切り離して調整剥離を加えて穿孔して、直径3 mm程の算盤玉1個に仕上げる。このような玉作りの工程に各種鉄製工具が使われている。断面長二等辺三角形の鉄塊や先端がやや細くなる板状工具は、水晶結晶体を分割する際に楔として使われ、マイナス・ドライバーの先端部分に似た小さな棒状の工具は、角柱体の調整剥離と小玉の分割に使われたものと思われる。だが、玉の穿孔には安山岩や瑪瑙、碧玉の石錐が依然として使われていた。日本海沿岸の諸地域では、後期後半以降に直径1 mm前後の針状の鉄棒が製作され、これが錐として使用されることとなる。

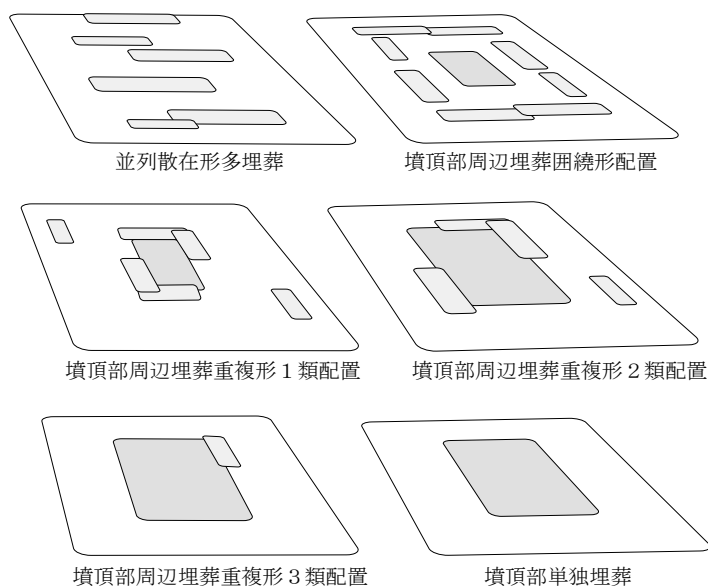
ところでこのような碧玉・緑色凝灰岩や水晶の玉類を大量に生産するために奈具岡遺跡の弥生集落は営まれていたとみられるが、水晶製装身具は、丹後地域では後期初頭の中郡大宮町三坂神社墳墓群3号墓第10号主体部で検出された16点<sup>(8)</sup>のみしかないのである。他に生産地である奈具岡遺跡以外にはその出土例をみないことから、他地域への贈答品に供されたと考えるのが妥当であろう。時代は下るが『魏志倭人伝』には、壹与が魏に献上した貢物として「白珠五千」が挙げられているが、このような水晶の白い珠が鉄資源と交換された可能性も考慮すべきであろう<sup>(9)</sup>。

日常の食料や衣類の獲得など自らの親族や隣人達との互酬的な交換活動とは異なり、遠隔地の貴重な財物の入手には、それなりの社会の成熟が前提となる。つまり、交渉先との政治的関係を取り結ぶための情報収集はもちろんのこと、遠隔地との贈答のために、返礼となる特殊な貴重財を生産しなければならない。それには労働力の集約的投入を行わねばならず、特殊な生産技術の習得やその生産に関わる集団の編成を行うことが必要不可欠となる。外部社会との貴重財の交易とは、普段みない彼方の宝物を手に入れるためだけでなく、内部社会においては労働の集約化を促し、労働価値を新たな威信という上位の価値体系に変換させる手段であるとも言える。後期には、このような彼方の地から来た貴重財の一部が首長の威信財として利用され、かつ墓に副葬され始めることになる。

## 2. 弥生時代後期〈丹後の方形台状墓と副葬鉄器〉

### 方形台状墓の変遷

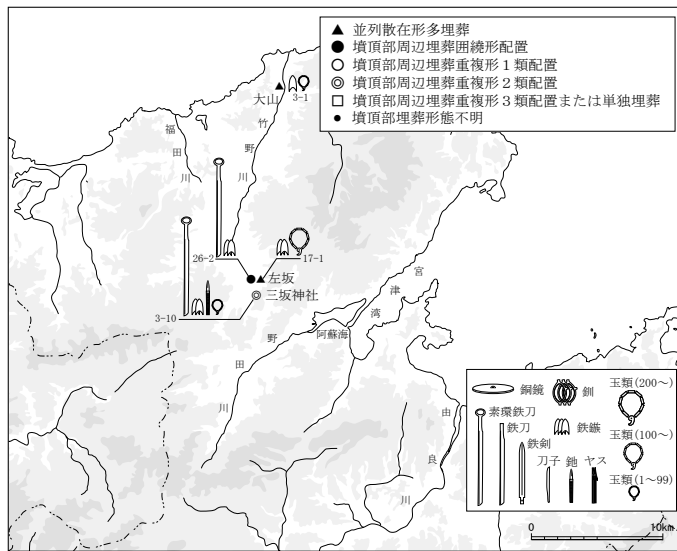
日吉ヶ丘遺跡にみられた貼り石方形墳丘墓は中期後葉に盛んに造られたが、後期には影をひそめる。後期前半、丘陵を区画・整形することによって長方形平坦面を確保して埋葬を継続させつつ、接続した台状墓が丘陵全体を覆っていくようになる。墳頂平坦面における中心埋葬はさほど意識されず、ほぼ同規模の墓壙が並列、あるいは直列・直交の位置関係を持って広がる。このような埋葬手順(並列散在形多埋葬(以下第2図参照))は、<sup>(10)</sup>韓国の慶尚南道金海市良洞里墳墓群にも類似しており、後期前葉においては朝鮮半島南東部(弁辰地域)からの墓制の影響を窺うことができる。しかし、このような埋葬手順を採る墳墓群からは、それほど顕著な副葬品をみることはない。むしろ、墳頂部の中心埋葬の墓壙が大きくなり、その周囲に埋葬が継続する二者の墓壙配置形態(墳頂部周辺埋葬囲繞形墓壙配置と墳頂部周辺埋葬重複形墓壙配置)に丹後地域の台状墓の特徴があるといつてよい。墳頂部周辺埋葬囲繞形は、初葬者と目される中心埋葬の墓壙の周囲に次々と埋葬が行われ、結果的に中心埋葬を取り囲むような墓壙配置になるものである。墳頂部周辺埋葬重複形も中心埋葬を取り囲む埋葬が行われる点では前者と一致するが、墳頂部の中心の墓壙の一端を故意に破壊するように墓壙を穿ち、重複させ続ける点が異なる。墳頂部周辺埋葬重複形には、中心埋葬の墓壙が墳頂部周辺埋葬囲繞形のそれとほぼ変わらず、周囲の墓壙よりやや大きいだけのもの(1類)と、中心埋葬の墓壙が



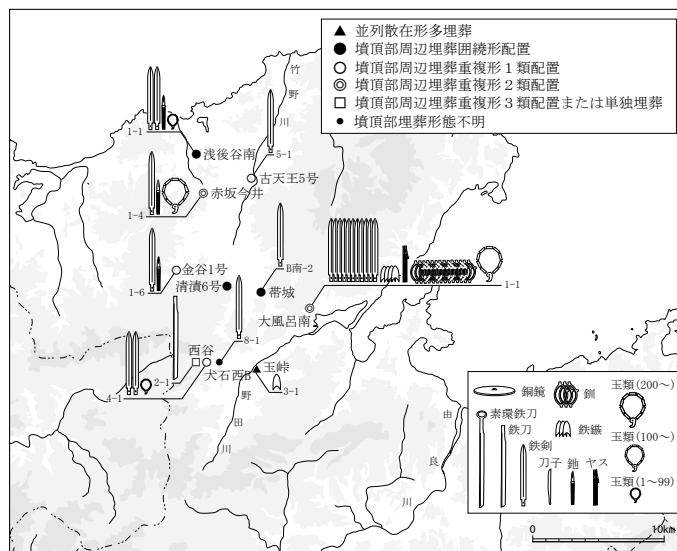
第2図 丹後地域方形台状墓の埋葬類型

極端に大形化するもの(2類)、さらに中心埋葬の墓壙が大きい点は2類と変わらないが、次の埋葬のために小さな墓壙が1度だけ穿たれるだけになるもの(3類)に分類できる。

第3～5図に、丹後地域の後期台状墓の時期別分布と、おもに中心埋葬から出土した副葬品の数量を簡便に示した。<sup>(11)</sup>後期前半、竹野川下流域では



第3図 丹後地域弥生時代後期前半の台状墓

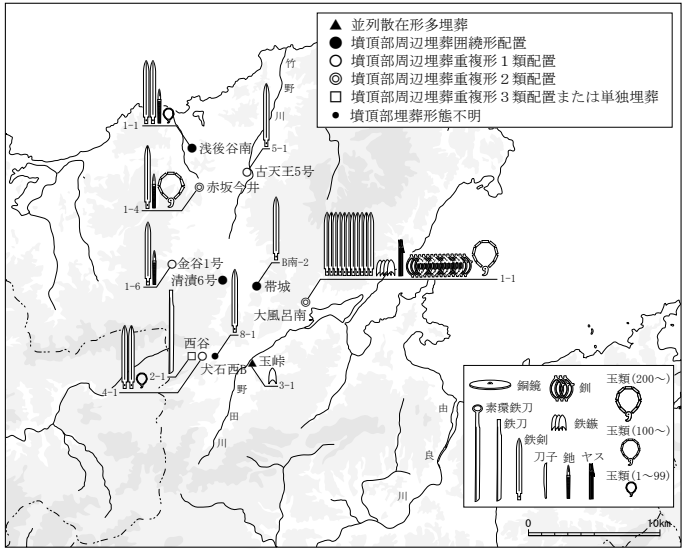


第4図 丹後地域弥生時代後期後葉の台状墓

竹野郡丹後町大山墳墓群<sup>(12)</sup>が造営され、竹野川上流域には素環頭鉄刀を出土した中郡大宮町三坂神社墳墓群<sup>(13)</sup>と同町左坂墳墓群が造営される(第3図)。丹後地域の後期台状墓は、この竹野川の流域に初めて造営されるようである。とくに後期初頭の三坂神社墳墓群3号墓第10主体部は、墳頂部周辺埋葬重複形2類の墓壙配置を呈する。

素環頭鉄刀だけでなく、鉄鏃2・水晶玉16・ガラス玉24・黒漆塗杖など、当時としては傑出した副葬品を持っていた。素環頭鉄刀は、当時の漢の先端鍛造技術で作られたものである。大陸では前漢中期以降、鉄製の大刀が普及するが、これは単なる形態の変化ではなく鋼素材製作技術の進展がその背景にあるという<sup>(14)</sup>。当時の国際情勢からすれば、素環頭鉄刀は政治的関係なしには簡単に入手し得ないものであった。

後期後葉には、福田川・竹野川流域の周縁丘陵上に多くの台状墓が分布する。いずれも中心埋葬に鉄剣一振りか二振り、あるいは鉈を副葬する傾向がある(第4図)。鉄剣は朝鮮半島南東部、弁辰地域出土例に類するものもあり、彼地からもたらされたものもあるのだろう。鉈の副葬も盛行する<sup>(15)</sup>。鉈は裝飾性の高い木製容器や調度品の製作には欠かせないものであった。山陰・北陸両地方でみつかると同様の花卉状のデザインをもつ木製高杯や木製ジョッキ形容器などはともによく似ており、両地域間の交流の結果とみることが



第5図 丹後地域弥生時代終末期の台状墓  
 町大風呂南墳墓群が造営される。<sup>(17)</sup> 1号墓第1主体部からは鉄剣11, 鉄鏃4, ヤス, 銅鏡13, ガラス釧1, 貝輪1, 各種玉類が副葬されていた。後述するように, これらの副葬品は, 竹野川・福田川流域の墳墓の中心埋葬にはみられないものも多く, 野田川下流域の首長が, 主流派の竹野川・福田川流域の首長達とは異なる地域との遠隔交易を模索した結果だったのかもしれない。しかし大風呂南墳墓群は, 墳頂部周辺埋葬重複形2類の墓壙配置を示す点で, 先の三坂神社墳墓群3号墓や竹野郡峰山町赤坂今井墳丘墓<sup>(18)</sup>と共通性がある。丹後地域の台状墓の葬送儀礼の執行に関して, ともに共有された社会規範があったこともわかる。

終末期には, 台状墓は少なくなるようである。竹野川流域よりも野田川流域に造墓活動の中心舞台を移したようである。鉄剣や鉞の副葬も以前のように流行しなくなる。むしろ北陸地方との歩調をあわせるかのように鉄刀の副葬が増える。野田川流域の内和田5号墓<sup>(19)</sup>では, 当該期の山陰・北陸両地方に普及する鉄刀や鑿頭形鉄鏃が副葬される。台状墓の墓壙配置では, 中心埋葬の墓壙周囲に次の埋葬を継続しなくなり, 墳頂部周辺埋葬重複形3類の墓壙配置や単独の埋葬が目立つようになる。丹後地域に特徴的な方形台状墓の葬送儀礼習俗が衰退していく状況が窺えるのである。

竹野川流域の大田南墳墓群2号墓と5号墓第1主体部<sup>(20)</sup>からは, 画文帯環状乳神獸鏡と青龍3年銘方格規矩四神鏡がそれぞれ出土している。鶴島三壽氏によると, 龍鈕をもつ一部の後漢鏡の銘文には蜀の地域にあたる広漢郡の尚方作とされるものがあることから, 画文帯環状乳神獸鏡は蜀の官営工房で製作され, 広漢西蜀の銘をもつ漆器などとともに楽浪郡にもたらされた可能性を指摘している。<sup>(21)</sup> また, 福永伸哉氏によると, 青龍3

できる。丹後地域でも鉞の生産が開始されていたと考えられ, 玉類生産だけでなく, 付加価値の高い木製工芸品の生産とその交易も行っていたと考えたい。時代は下るが中郡峰山町古殿遺跡<sup>(16)</sup>の案などもそのような交易品とされたものではなかろうか。今後の資料の増加を待ちたい。

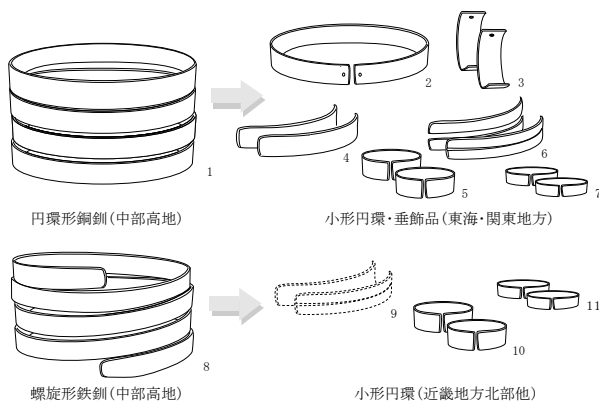
後期後葉の初期には野田川下流域に位置する岩滝

年銘方格規矩四神鏡は、鈕孔が長方形で方格の対角に開口することや、四神像がT L V 字文に向かって右側に配置され、体の向きが反対になること、正L字文であること、方格が歪んでいることなどの特徴から、特異な方格規矩鏡の一群に包括されるものであり、魏の年号をもつ三角縁神獸鏡の製作工人達と技術系譜が近い工人によって製作された可能性が指摘されている<sup>(22)</sup>。製作場所が異なる2つの銅鏡が同じ尾根の台状墓に副葬された経緯については詳らかではない。3世紀前半、三国時代の動乱のなかで丹後地域の首長達が大陸との独自の交渉を行ったか、あるいは新しく神仙世界を象徴する銅鏡を副葬し始めた邪馬台国勢力の政治的傘下に組み込まれたか、意見の分かれるところでもある<sup>(23)</sup>。

### 与謝郡岩滝町大風呂南墳墓の副葬鉄器と東方交流

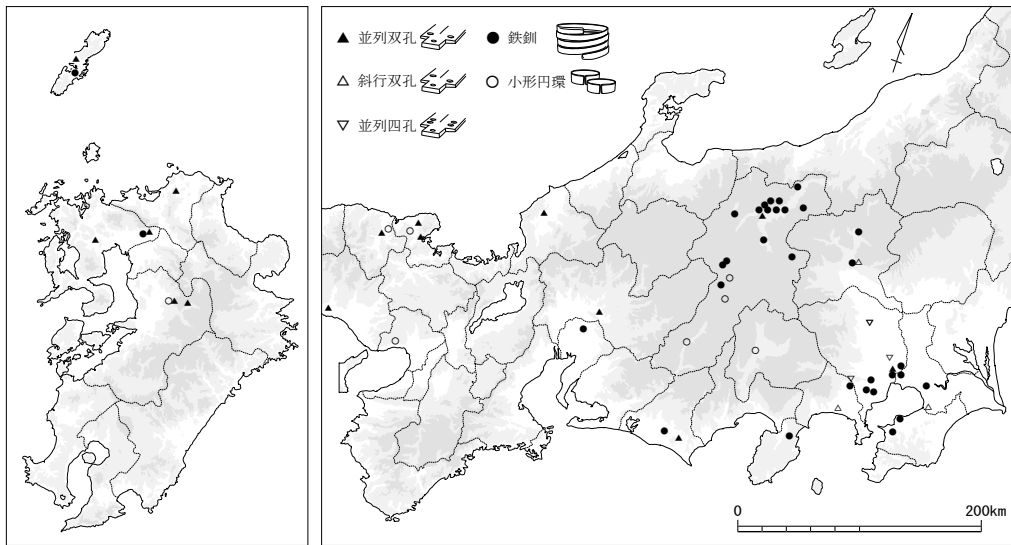
ここで、主流派となる竹野川・福田川流域の台状墓とは異なり、野田川下流域に立地した与謝郡岩滝町大風呂南墳墓群の副葬鉄器に注目したい。出土した鉄鏃のなかには、鏃身中央の鑄や柳葉式にみられる独特の関の曲線的造形はないものの、定角式あるいは柳葉式と呼ばれる前期古墳副葬鉄鏃に類似するものがある。類品は、北部九州から瀬戸内地域に多いものである。また、漁撈具の小形の組合せ式ヤスは、前期古墳でもその出現期から採用される副葬品目に類似する。しかし、その一方で、大風呂南1号墓第1主体部にみられた鉄剣には、前期古墳副葬鉄剣には継続されない形制のものがある。墓壙北西側（被葬者頭部側）、二組にまとまって出土した九振りの鉄剣は、短い茎部に目釘孔一孔と角関をもち、刃関部分に双孔を穿つものである。丹後地域の類例としては、竹野郡弥栄町古天王5号墓出土鉄剣のみであり<sup>(24)</sup>、後期後葉の時期、鉄剣副葬がよくみられる丹後地域でも少数派である。このような短茎刃関双孔の鉄剣は、近畿地方よりもむしろ北部九州やその周辺、あるいは東海・関東地方にみられるものである<sup>(25)</sup>（第7図参照）。

このほか丹後地域において、東方諸地域との交流を示唆する副葬鉄器として扁平な帯板を曲げて環状に造り出した鉄製小形円環がある。丹後・但馬



第6図 鉄剣の再加工と鉄製小形円環

地域では、兵庫県豊岡市若宮4号墓第4主体部・京都府中郡峰山町金谷1号墓第3主体部にみられる<sup>(26)</sup>。この鉄製小形円環がどのような由来の物か考える上で参考となるのは、銅製の小形円環の研究である。臼居直之氏は、詳細な資料操作によって銅製小



第7図 刃関双孔鉄剣と鉄釦・小形円環出土地（弥生時代後期後半～終末期）

形円環が带状円環形銅釦の分割・再加工による再生品であることを証明した。<sup>(27)</sup> 白居氏は、带状円環形銅釦（第6図1）の一箇所を切断し、穿孔して垂飾品（2・3）として使用されるもののほかに、円環を断ち切り、熨した（4）後に裁断し、再び曲げ輪造りによって小形円環（5）に再生されるものや、さらに帯板状の銅片を条刻の後に縦方向の裁断（6）して、幅の減じた円環（7）に作り出されるものがあることを例証している。この銅製小形円環の製作工程を敷衍してみれば、その断面が扁平となる金谷1号墓や若宮4号墓の鉄製小形円環（10・11）についても带状螺旋形鉄釦（8）の切断、再加工によるものとする余地もみられる。带状螺旋形鉄釦は中部高地に集中して分布している。鉄製小形円環はその南方に分布していることから、中部高地において製作された鉄釦が何らかの要因で切断・再加工され、その南方に供給されていたと想定される（第7図）。東海地方との交易によって近畿地方北部にまでもたらされたと推測することも可能ではなかろうか。

### 3. おわりに

弥生時代中期の丹後地域では、漢で生産された鉄器や鉄素材の破片が舶載された。丹後地域では、それを原料として鍛冶加工を開始し、袋部をもつような鍛造鉄器の生産に成功したものとみられる。また、玉作りのために鉄製工具を作り出し、贈答品として多くの白珠を作った。この地域の首長達は、良好な潟湖を拠点とした海上交流を通して遠隔地との交易を行ったが、それと同時に多くの労働力を玉作り作業などに投入せねばな



らなかった。丹後地域の首長達は、そのリーダー・シップを示すために漢の素環頭鉄刀や各種釧・鉄剣などを所有しはじめ、新たな威信を誇示することに腐心したのである。

仔細にみれば、竹野川・福田川流域の首長達は、中期以来、一貫して漢や弁辰の鉄の入手を図った。これに対して野田川流域の首長達は、北部九州を含めた日本海側沿岸の諸地域や近畿・東海地方などとの間の仲介を行う遠隔取引に目をつけたと考えることもできそうである。丹後地域では、野田川中流域にのみ銅鐸3点（近畿式・三遠式）が集中することも、この地の首長の性格を反映していると思える。しかし両地域ともに四隅突出形墳丘墓ではなく、方形台状墓といった独自の墳丘形態を祖先の墓として採用し、かつその埋葬手順にも共通する部分が少なくない。このことから、両地域の首長達は例えば対外的な利害関係を調整するような相互補完的な連携組織を共同で維持していたとも思われる。外来の貴重財を入手する職掌をもつ竹野川・福田川流域の首長達と、それを元手にして列島の諸地域との取引に奔走した野田川流域の首長達が連合した社会であったと考えることも一興かもしれない。両地域の首長連合の中核組織に参画した人々が、墳頂部周辺埋葬重複形2類の中心墓壙に眠る被葬者達であったと想像してみたいのである。

久美浜に注ぐ佐野谷川や川上谷川流域、あるいは舞鶴湾に注ぐ由良川流域の首長達の動向も今後の調査研究課題であろう。

## 注

- 注1 加藤晴彦・広瀬和雄・宇野隆夫・野島永『丹後最古の王墓「日吉ヶ丘墳墓」出現の謎に迫る』資料集 加悦町・加悦町教育委員会、2000年
- 注2 前掲注1文献
- 注3 清永欣吾「鉄製品の化学分析」『扇谷遺跡発掘調査報告書』京都府峰山町文化財調査報告書第10集 峰山町教育委員会、1984年、田中光浩ほか『扇谷遺跡発掘調査報告書』京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第12集 峰山町教育委員会、1988年
- 注4 大澤正己「奈良遺跡出土鉄製品・鉄片（切片）の金属学的調査」『京都府遺跡調査概報』第76冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、1997年
- 注5 野島永「弥生時代鉄製品の事例」『京都府埋蔵文化財情報』第44号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、1992年
- 注6 篠原芳秀・井林秀樹ほか『西本6号遺跡』（財）広島県埋蔵文化財調査センター、1997年
- 注7 河野一隆・野島永「奈良遺跡（第7・8次）」『京都府遺跡調査概報』第76冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、1997年
- 注8 今田昇一・肥後弘幸ほか『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』京都府大宮町文化財調査報告書第14集 大宮町教育委員会、1998年
- 注9 野島永・河野一隆「玉と鉄」『古代文化』第53巻第4号（財）古代学協会、2001年
- 注10 金正完・孫明助ほか『金海良洞里古墳発掘調査報告書』文化財研究所、1989年、林孝澤『金海良洞里古墳文化』東義大校博物館学術叢書7 東義大校博物館、2000年  
近年、高野陽子氏は弥生時代後期の丹後地域にみられる下膨れの体部を特徴とするコーヒーカップ形の小形壺が、朝鮮半島南東部（弁辰地域）に分布するいわゆる巾着袋形壺（提袋形壺）の影響を受けて成立した器種であることを指摘している。

- 高野陽子ほか「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(3)」『京都府埋蔵文化財情報』第83号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 2002年
- 注11 赤坂今井墳丘墓は, 中心埋葬の棺にまで調査が及んでおらず, その副葬品が明らかでないことから, 中心埋葬の墓壇に重複する最も大きい周辺埋葬である第4主体部の副葬品の数量を示した。また, 金谷1号墓では, 中心埋葬から副葬品が出土していないため, 同様に最も大きい周辺埋葬である第6号主体部の副葬品の数量を示した。
- 注12 平良泰久ほか『丹後大山墳墓群』京都府丹後町文化財調査報告第1集 丹後町教育委員会, 1983年
- 注13 『左坂墳墓群発掘調査現地説明会資料』大宮町教育委員会, 1993年, 肥後弘幸・細川康晴「左坂墳墓群(左坂古墳群G支群)」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会, 1994年, 石崎善久「左坂古墳群」『京都府遺跡調査概報』第60冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 1994年
- 注14 潮見浩『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館, 1982年
- 注15 福島孝行「弥生墳墓における鉦の副葬作法について(1)」『京都府埋蔵文化財情報』第78号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 2000年
- 注16 鍋田勇ほか『京都府遺跡調査報告書 古殿遺跡』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 1988年
- 注17 白敷真也ほか『大風呂南墳墓群』岩滝町文化財調査報告書第15集 岩滝町教育委員会, 2000年
- 注18 黒坪一樹・石崎善久「赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財情報』第92号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 2000年, 石崎善久ほか『赤坂今井墳丘墓第3次発掘調査概要報告』京都府遺跡調査概報第100冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 2001年
- 注19 森 正「内和田古墳群」『京都府遺跡調査概報』第49冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 1992年
- 注20 肥後弘幸・鶴島三壽ほか『大田南古墳 大田南2・3号墳 矢田城跡発掘調査概要』京都府弥栄町文化財調査報告第7集 弥栄町教育委員会, 1991年, 横島勝則編『大田南古墳群・大田南遺跡・矢田城跡 第2次～第5次発掘調査報告書』京都府弥栄町文化財調査報告第15集 弥栄町教育委員会, 1999年
- 注21 鶴島三壽「龍鈕を持つ鏡—大田南2号墳出土鏡を中心に—」『京都府埋蔵文化財論集』第2集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 1991年
- 注22 福永伸哉「舶載三角縁神獸鏡の製作年代」『待兼山論叢』第30号 大阪大学文学部, 1996年
- 注23 福永伸哉「中国鏡流入のメカニズムと北近畿の時代転換点」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10 雄山閣, 2000年
- 注24 丸山次郎「古天王墳墓・古墳群」『弥栄町内遺跡発掘調査報告書』京都府弥栄町文化財調査報告第19集 弥栄町教育委員会, 2001年
- 注25 高野陽子氏も, 丹後地域における東海系土器や舞鶴市匂ヶ崎三遠式銅鐸や大風呂南墳墓群第1主体部の有鉤銅釦などを手がかりに, 後期後半における東海地方との交流について考察している。  
高野陽子「土器の交流—近畿北部と東海—」『第9回 春日井シンポジウム2001年』春日井市教育委員会, 2001年
- 注26 石崎善久「金谷古墳群(1号墓)」『京都府遺跡調査概報』第66冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター, 1995年, 瀬戸谷皓編「豊岡市鎌田・若宮古墳群」『豊岡市文化財調査報告集1989年度』豊岡市文化財調査報告書23～25 豊岡市教育委員会, 1990年
- 注27 白居直之「再生される銅釦—帯状円環型銅釦に関する一視点—」『長野県埋蔵文化財センター紀要』8(財)長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター, 2000年  
なお, 第6図は白居氏の文献第8図を基に作成した。